



台風の上陸は、どの部分がかかったらいうの

台風の中心が上陸したとき

日本では、台風の中心が北海道、本州、四国、九州の4つの島のどこかに達したときを台風の上陸といっています。小さな島や半島を横切って、すぐに海上へ出たときは、通過といえます。ですから、沖縄県では台風が通過することがあっても、上陸することはありません。

台風の発生は、夏(6~8月)と秋(9~11月)では、ほぼ同じくらいですが、月別で見ると、発生数、上陸数ともに、8月が最も多くなっています。8月のなかばを過ぎて太平洋高気圧が弱まってくると、日本へ上陸するようになります。

1年間に日本へ上陸する台風の数は、平均3個です。また、全体の3分の1以上は、九州に上陸しています。上陸しなくても沖縄本島などの島や、本州の近くを通った台風もふくめると、毎年、夏から秋にかけて5、6個の台風が日本に影響をあたえています。

台風による被害

台風がくるころを、昔から、二百十日とか二百二十日といっています。この時期は、今の9月で、大型の台風が最も多い月です。

台風による強い風は家屋をたおしたり、こわしたりします。また、樹木や農作物に大きな被害をあたえます。

台風による大雨は、河川をはらんさせて洪水を起こしたり、山くずれや、がけくずれなど、大きな被害をもたらします。(監修・村山 貢司)

